

アール・スタンレー・ガードナーの 「ペリー・メイスン」作品における前書き

日吉和子

はじめに

アール・スタンレー・ガードナーのペリー・メイスンが登場する作品は全部で82作品である。その内、前書きがあるのが、48作品で、実に5割を超えている。クリスティーの前書きの方が数字上では多いが、同一の主人公のシリーズ作品であることを考えると、比較できないほど多いと言えるだろう¹⁾。しかも、クリスティーの場合はそのほとんどが第1タイプ（1人または2、3人の名前を挙げる献辞タイプ）の前書きであるのに対して、メイスン・シリーズは、その全てが第2タイプ（ペーパーバック版で1ページ以上に渡る文章形式）の前書きであることは驚きと言えるだろう²⁾。そこで、この論文では、ガードナーの前書きの内容を詳しく分析・分類化し、その特徴を明確にしてゆくことにする。

ガードナーの前書きの全体的傾向

ガードナーの前書きの特徴として、第1に、既に言及しているように、その添付数の多さが挙げられるが、とりわけ1949年以降に発表された50作品中46作品に前書きが付いているのは驚異的としか表現できない。さらに、残りの4作品の内、*The Case of the Fenced-In Woman*（邦題：『囲いの中の女』）と*The Case of the Postponed Murder*（邦題：『延期された殺人』）の2作品は、ガードナーの死後に出版されたもので、それぞれの冒頭に出版社から、同一の注が付けられている。そこから、この2作品はガードナーが1970年に死ぬ「数年前に書かれた」が、「棚上げにされ」、彼の「出版保留ファイルの中に残されていた」小説であること、そして「それはいつでも出版できる状態であったと出版社は信じている」が、ガードナー本人が通常おこなう「最終原稿の仕上げチェックがなされていない」ことが述べられている³⁾。従って、この2作品に著者の前書きが無いのは自然の成り行きと言える。それまでの前書き添付状況の流れから考えると、ガードナーの生存中に出版されていたら、前書きが付けられた可能性が大きいと推測される。一方、1949年以降で彼の前書きがない残りの2

作品は、1953年出版の *The Case of the Green-Eyed Sister* (邦題：『緑色の眼の女』) と1965年の *The Case of the Troubled Trustee* (邦題：『使い込まれた財産』) となる⁴⁾。それらに前書きが書かれなかった理由をガードナーに尋ねたいとすら思わせる例外に分類される2作品である。一方、1949年以前の32作品で前書きが添付されているのは2作品に留まっている。1949年を境に、それ以前に前書きが添付された作品数とそれ以降に添付されなかった作品数が同じであることは単なる偶然ではあるとしても、1949年以降の作品への驚異的な添付率をより一層際立たせる相違である。この1949年を境に添付率に著しい変化が見られる点はガードナーの前書きの第2の特徴と言える。

さて、これらの特徴に加えて、ガードナーの前書きには、もう1つ注目すべき点がある。それは前書きの長さである。これに関しても1949年を境に相違が見られる。1949年以前の2作品は、原書ペーパーバック版で2ページに満たないが、それ以降は平均して2ページ以上に渡り、4ページに及ぶことすらある。実際それらの前書きを全て合わせると1冊の本が完成するのではないかと思わせるほどの総ページ数である。

ガードナーの前書きに関して、ドロシー・B・ヒューズが、彼女のガードナーについての伝記『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』の中で次の様に言及している。ガードナーのメイスン・シリーズの第1作目の『ビロードの爪』に献辞が無いことに気づいた出版社からの問合せの手紙が彼の手元に届かず、後で彼が献辞を知らせたが間に合わなかった。その一方で、ガードナーは当時の彼の出版エージェントのロバート・トーマス・ハーディーに「著書を誰かに捧げる習慣を自分は好まない、『ことに凡作』の場合はなおさらだ」と書き送り、「探偵小説というのは元来文学史に新しい一頁を記すというよりも、一時の娯楽に供されるためのものなのだから、献辞無しで出すことにしましょう」と言い、その結果、メイスン・シリーズの26冊目の *The Case of the Golddigger's Purse* (邦題：『黒い金魚』) に至るまで献辞が付けられなかった。そして、その後の6冊にも献辞がないまま、「一連の前書きが始まる」とヒューズは書いている⁵⁾。事実、その1949年に出版された33冊目の *The Case of the Dubious Bridegroom* (邦題：『怪しい花婿』) を皮切りに、既に言及済みであるが、合計46作品に前書きが添付されている。ところで、このヒューズの記述により、1949年以前の2作品に前書きが見つかったと言う事実との矛盾点が浮かび上がってくる。この論文では、その1949年以前の前書きを取り上げ、その特徴を論じると共に、新たに判明したその前書き添付作品数の矛盾点を解明してゆく。

1949年以前の前書き

1. 旅行体験記から始まる読者啓発的前書き

ヒューズが49年以前に唯一献辞が付けられたとして挙げている1945年の*The Case of the Golddigger's Purse*⁶⁾の献辞を見てみよう。ヒューズは、簡単にその作品が「ユカタン半島と南アメリカで書き上げられ」、「『<国境の南>で知り合った友人たちへ』捧げられている」⁷⁾と書いている。しかし、実際添付されているものは単なる前書きの第1タイプの献辞ではなく、第2タイプに属する長いものである。それでは詳しく内容を見てゆくことにする。

その前書きは“Foreword”ではなく、“Dedication”となっており、まさに、献呈の辞ということになる。ペーパーバック版で1と3分の1ページ程の長さで、確かに1949年以降の前書きと比較すると短い。献呈の辞は、一般的には、家族や親しい友人、または作品の執筆や出版の際に協力してくれた人々、つまり作品を完成・出版することに関してお世話になった人々に向けられるものである。しかし、このガードナーの献呈の辞はそれとは少々異なる性質を持っている。

ガードナーは、この作品をメキシコ旅行中のユカタン半島のマヤ遺跡の中で書き始め、コロンビアで完成させたと冒頭で述べている。そして、「その作品のプロットは山々やジャングルと言う興味深い地域の上を穏やかに滑空する飛行機の中にいる間に練り上げられた」と続けている。そこから、読者はこの小説はメキシコやラテンアメリカのどこかの国が舞台なのかと一瞬思ってしまう。しかし、作品を読んでもみると、メイスンは、いつものロサンゼルスにある彼の法律事務所において、黒い金魚が関係する殺人事件に巻き込まれる話であり、それらの国々とは無関係であることが最終的には判明することになる。さらに、終りに近い別の箇所では、この旅行は雑誌の記事の資料集めのためであり、この小説を書くのは本来の目的ではなかったことも分かる。それにもかかわらず、既に言及しているように、ガードナーはこの本を「国境の南で私が見つけた友人たちへ」捧げると述べ、この献辞を結んでいる。そして、その理由として、旅先で知り合った地元の人々が、「この本の執筆をそのように心地よく楽しい仕事にさせる手助けをしてくれた」⁸⁾点を挙げている。文字通り、旅先での地元の友人たちが直接彼の執筆の手助けをしたわけではなく、この旅行中に快適に執筆できたことが彼らのお陰であるとするならば、単に「国境の南で私が見つけた友人たちへ」と言う第1タイプの献辞だけで十分であるように思える。しかし、この前書きの導入部と結びの言葉との間に、明らかに読者向けの話が挟み込まれている。

まず、旅行者として、ガードナーは、「百聞は一見に如かず」の諺通りの体験を通して、現地の人々についての認識を新たにした点に話を進めている。彼は旅行中、執筆の合間に地元の人々との出会いや交友を通して、ラテンアメリカ諸国の人々が「そ

れまでに会った中でもっとも興味深い」,「鋭敏な心を持つ」人々であり,さらに,「誇り高く, 独立心に富み, 自由を愛し, 深い知識を持っている」ことを悟る。その現実の姿と世間に流布されているイメージ像との相違を認め, その原因として, 彼を含め, 旅行中, 「著述家たちは, 余りにも“珍しい”物ばかりを求めようとしがち」で, その結果, 米国内には「これらの国々の教養ある, 目覚めた人々については, あまりにも書かれていない」点を挙げている⁹⁾。ここで彼は, 近隣諸国についての当時の米国人の認識不足の状況を述べると同時に, それらの国々のことを知るには現地に行く, つまり旅行する必要性があることを示唆している。

ところで, それらの国民性についてガードナーの認識を新たにさせたのが, 現地での地元民との交流であるが, そこで彼が交流を持った人々が問題となる。上記で挙げた特徴は一部の限られた人々, つまり, 彼と同業の著述家たち, 知識人たち, または, 上流階級の富裕層との交流を通して得られたものに過ぎないのではないかと言う点である。その批評を回避する意図が働いたのかどうかは定かではないが, ガードナーはその点を明確にしている。彼は, 「単なる好奇心しか持っていない行きずりの旅行者」がそれらの国々の上流階級の家ドアを開けさせるのは米国の「排他的な郊外の住宅地にある家のドアを開けさせるのと同じぐらい難し」¹⁰⁾ だったことから, ガードナー曰く, 旅行者は “has invaded helpless privacy of the rural peon” (田舎の貧しい人々の困窮した生活に立ち入った), つまり, 翻訳版では「労働者の貧しい生活の中に立ち入ることになる」¹¹⁾。この記述によりガードナーが現地で交流を持った人々はこの類の人々ということが分かる。

ここでガードナーが “peon” という言葉を使用している。この “peon” とは「極貧の人」, 「日雇い労務者」, 「不熟練労働者」, 「社会的地位の低い人」などを意味する言葉である。ここからガードナーが彼らに対して旅行者として抱いた第一印象は貧困であることが伝わってくる。それは, 現在でも, 米国と比較して指摘される問題ではあるが, その貧困認識を持ってそれらの国々を訪れたガードナーは, 旅行者の目に映るその貧しさについての認識も新たにしている。そして, 独特な視点から彼の見解を披露している。「南では, 貧乏人は, 健康的な住居と言う点からいえばはるかに適当ではあるが, 暖かい気候のために…われわれ北方人の目には貧弱に見える家に住んでいる」と彼は評している。そして, ガードナーは, 「われわれにも貧乏はある。われわれの貧乏人は貧民街にひしめき合っている」と述べている。これは, 貧乏人は限られた場所において, ある意味では米国全体では貧困状態が目立たないことを示唆しているとも解釈できる箇所である¹²⁾。結局, 米国の旅行者にとっては外見上みすぼらしく見えるそれらの家々は実際には, 周囲の環境に適しており, 米国のスラム街の居住状態よりも健康的であるというのが彼の結論である。それに関連して言えば, ガードナーは実際にカリフォルニア州ヴェンチュラ郡のオクスナードと言う当時は「喧騒と刺

激と若々しい活気に満ちた町、娼婦と賭博と暴力の町」¹³⁾で弁護士をしていた時に出合った貧しい人々やスラム街の実態を見聞きしたことがこの比較の背景にあると推測される。この新たな貧困についての認識をガードナーにもたらしたのも地元民との交流のおかげと言うことになる。この点が彼らをこの献辞の対象にさせた一因と言えるかもしれない。

この前書きで既に言及しているように、ガードナーが、総体的に上流階級に属する一部の人々以外の大多数を労働者階級に分類し、彼らの生活を貧しいと評し、社会全体の貧しさを伝えようとしているのは明らかである。そこから、ガードナーは話題を経済格差問題へと向かわせ、「持てる国」米国と「持たざる国」ラテンアメリカ諸国とのいわゆる富の分配問題を持ち出してくる。そこでは、「すべての国々の労働者に彼らが生み出す手助けをした富と余暇の公平な分け前をいかにして与えるか」、「それと同時に個々の人々の主導権をいかにして維持するか」¹⁴⁾の点を挙げている。それには「永続する平和をもたらす努力」が含まれ、「地球の半分（ここではメキシコを含むラテンアメリカ諸国をさすと考えられる）の富と幸福は、これらの問題が公平に正しく解決される度合いにかかっている」¹⁵⁾と続けている。この作品が出版されたのは、1945年で、第2次世界大戦が終結する年である。「永続する平和をもたらす努力」という言葉には、明らかに、この前書きが書かれた時代が反映されている。さらに、「個々の人々の主導権を維持」と言う言葉は、国家政府主導の社会共産主義ではなく、国民主権の民主主義社会の下での実現を示唆し、戦後の世界の覇権を巡り、社会共産主義大国ソビエト連邦（現ロシア）の存在がさらに大きく意識されて来る当時の世相を暗示している。これらの点から、ガードナーが当時の社会情勢を意識しながらこの前書きを書いたことが分かる。

ところで、ガードナーが富の分配の箇所、「余暇」を付け加えているが、これも社会共産主義との違いを示す意図で使われた可能性がある。それと同時に、それは、彼の話に次に展開させるために打たれた布石とも考えられる。ガードナーは、次の世代は、「疑いなく」この富の分配の問題を「必ず扱うに相違ない」とその箇所の冒頭で述べている。その主張に繋がる理由がこの「余暇の公平な分け前」である。ガードナーはそれを旅行と結び付けている。そもそも彼が経済格差問題に気づくきっかけとなったのがこの旅行であることを踏まえると理解できる思考の流れと言えるだろう。とにかくこの「余暇」を使い、次の世代では、普通の人（ガードナーは“average man”と言う言葉を使っている）が、交通機関の発達により飛行機に乗り、寒い北から熱帯の地域へと安全に快適に旅行できるようになる。そして現地の人々との交流を通して、彼らとの「かつて経験した最も愉快な、最も知的刺激のある交友」を新たにするためにその地に戻りたいと書く程の友情¹⁶⁾を得たガードナーの様に、相互理解を深め、友情関係を築くことができ、「そうなればわれわれは真に“良き隣人”」とな

り、経済格差問題に気づく米国人が増える。それ故に、余暇を利用した旅行はその問題解決への動きを促す足がかりになると彼は示唆している。そしてその箇所では、ガードナーは、「われわれは政治組織とは友人にはならない。われわれは人民と友人になる。友情を買うことはできぬし、友情を持って命じることができない。友情はただ育てることができるだけだ」とある意味でごく一般的な友情論を語っているように思えるが、友情は国家や政治を越えるもので世界平和に繋がると訴えていると解釈され、これも世界情勢を意識して書かれていると言えるだろう。

それでは経済格差問題解決に向かわせる程の友情関係を旅行者が短時間の内に築き上げることが可能かどうかの疑問が生じる。その問題は、ガードナーのメキシコ人に対する「親近感は徐々に育ったものではなく、いっぺんに気が合った」と言うヒューズの記述により解明できる。ガードナーと彼らとの関係に関して、ヒューズは、「ガードナーはメキシコの人々が持つ資質を賛美してやまなかった。彼らは心優しく、友情を尊び、誇りと威厳と自尊心を持っていた。それに彼らの礼儀正しさ、これも変転きわまりない世界の中で日に日に見いだしがたくなりつつあるものとして、また、ガードナーがたいせつにしていたニュー・イングランドの美徳の一つとして、賛美の対象だったにちがいない。ガードナーと彼らはたがいに愛情と友情を与えあった。両者は一緒にいてとても気楽だった」¹⁷⁾と書いている。ここで述べられているメキシコ人とは、この前書きの後の1947年にガードナーが初めてメキシコ領のパハ・カリフォルニア地域を旅行し、その後何回もその地域やメキシコへの旅行を通して知り合った人々を指している。しかし、このメキシコ人と「いっぺんに気が合った」と言う記述は、メキシコ人を含むラテンアメリカ諸国の「＜国境の南＞で知り合った友人たち」との間でも同様な友情関係を短時間で築き上げることができた可能性を裏づける証拠になるだろう。

「余暇の公平な分け前」による旅行とそれをきっかけに生まれる友情を通して富の公平な分配問題の解決を次世代に期待すると言う一連の話の流れは、旅行好きとして知られるガードナーらしい話の展開と言えるだろう。

以上のことから、ガードナーがこの作品を執筆するのを「そのように楽しい仕事にしてくれた」と言う一見単純そうな理由だけで「＜国境の南＞で知り合った友人たち」にこの本を献呈した訳ではないと言う点が明らかになる。旅行者として両地域間に存在する問題点とその解決策をガードナーに気づかせてくれた地元民との交流に対する感謝の念と言う形で、ラテンアメリカ諸国と彼らの貧困問題に読者の目を向けさせたいと言う意図を持ち、さらに戦争を含めた世界情勢に思いを馳せながらこの前書きは書かれたと考えられる。ガードナーのその思いの強さが献辞なしでの出版方針を破り、この前書きを付けさせる引き金となったと推測される。しかし、この旅行体験が彼にこの前書きを書かせる程強い思いを抱かせたとしても、これは彼にとっては継

続して取り組む問題ではなかったようで、前書き添付は単発に終わっている。しかし、この前書きは、社会問題の一つに読者の目を向けさせると言う読者教育の目的を持って書かれたと評価することができることから、次回論じることになる1949年以降の前書きに通じるものがある。

それでは次に、ヒューズが言及していない前書きが、実は、もう一つ1949年以前に存在している問題について、見てゆくことにする。

2. 初期のペリー・メイスンへの理解を求める前書き

a. 前書きの添付時期

前書きが添付されているペリー・メイスン作品を出版順で見ると、実は、1934年に出版された3作目の*The Case of the Lucky Legs*（邦題：『幸運の足の娘』、または『幸運の脚』）に前書きがあることが判明した¹⁸⁾。この前書きは、“A Note from Erle Stanley Gardner”と記されている。しかし、既に言及しているように、ヒューズによると、最初の25作品には前書きが添付されていないことになっている。つまり、手元にある版は1934年当時のオリジナル版ではないことになる。その前書きの最後の部分で、“this reprinting of *The Case of the Lucky Legs*”と書かれていることから、リプリントされる際にガードナーが書いた前書きであることが分かる。残念ながらこの前書きには日付がない。しかし、その添付年を推測する手がかりはある。それは、ヒューズのガードナーについての自伝の中にある。彼女は、その中で、それまでのリプリント版は「原版から再生され、ジャケットもオリジナル版と同じ」であったが、1939年に出版されたポケット・ブックスは、「判型、装丁とも既成のリプリント本とは異なる」¹⁹⁾と述べている。それで、著者ガードナーからの新たな注が付けられていることから、これはポケット・ブックスのリプリント版である可能性が浮上する。それは、1941年に出版されている。

しかし、ガードナーが、前書きの中で、「今では、ほとんど別の世界に思えるものの中で何年も前に」、当時「いわゆる高級大衆雑誌」の『サタデー・イブニング・ポスト』誌、『コリアーズ』誌、『リバティー』誌が存在した頃に、ペリー・メイスンは登場したと述べている。さらに、この前書きが書かれた時には最初の1誌しか生き残っていないと言及し、ある程度時間が経過していることを示唆している。『コリアーズ』誌、『リバティー』誌が存在していないとするガードナーの指摘により、1941年説は無くなることになる。なぜならば、その『リバティー』誌は1950年に、そして、『コリアーズ』誌は1956年に休刊しているからである。そして、『サタデー・イブニング・ポスト』誌は1968年に休刊している²⁰⁾。そこから推測すると、この前書きは1956年頃から1968年頃の間出版された版に添付されたということになる。そこで、手元の資料を基に次に考えられる可能性は、ガードナーがこの作品の版權を更新した

年の1961年である。版權更新時が一番妥当と考えられるが、少なくとも1968年までの間にリプリントされた版に添付されたことだけは確かと言える。添付年の問題に関してはこれ以降でも扱い、今後とも継続して調査してゆくことにする。それでは、次に、その前書きの内容を見てゆくことにする。

b. 前書きの目的：メイスン誕生まで

この前書きの主目的はその内容から、初期の頃のメイスンの人物像を弁明し、リプリント版を購入する読者にそのメイスンを理解し、受け入れてもらうことである。その前書きの中で、ガードナーは、初期の頃のメイスンを、“a young, relatively unknown fighting criminal lawyer”として言及している。その「若くて、その後のメイスンと比較すると世に知られていない戦う刑事裁判専門弁護士」は「万能合鍵を持ち、法律上の倫理規範の細かい点を衝動的に無視し、最も人目を引く型破りで向こう見ずな一連の行動をすることができる」(“can get into a series of most attractive escapades with skeleton keys and an impulsive disregard for the finer points of legal ethics”)と書いている。ウィリアム・F・ノーランは、これらの初期の作品の中のメイスンは、「その後の慎重で抜け目無い法廷弁護士よりも『ブラック・マスク』誌の私立探偵によりずっと近かった」²¹⁾と述べている。つまり、メイスンには初期の頃とその後の2つの姿があることになる。そして、その『ブラック・マスク』誌とは、当時のパルプ・マガジンの1つで、その雑誌に1922年にハードボイルドの探偵小説を連載し、有名になっていたのがダシール・ハメットで、同誌もハードボイルド系作品が掲載される雑誌と見なされていた²²⁾。つまり、初期のメイスンはハードボイルド系の主人公と言うことになる。

そのパルプ・マガジンについて、ノーランは、「1920年代に栄え始めており、その後20年間に渡り、物書きたちにとって巨大な自由競争市場になった。ガードナーはこの急成長する市場に入り込むことを固く決心した」と述べている²³⁾。ヒューズも「パルプ雑誌で作家としての第一歩を記すことは比較的容易だったので、ガードナーはこの分野にのりこむ気でいた」²⁴⁾と書いている。S・T・カミックは、「1930年代初期の頃」の米国のミステリー作品を作風で分類し、「ミステリーは(ダシール・ハメットやその他の『ブラック・マスク』のパルプ・マガジン作家と競い合う)ハードボイルドの荒っぽいものか、(エラリー・クイーンやアガサ・クリステイーの謎解き作品のような)比較的都会風のどちらかであった」と述べている²⁵⁾。そして、ノーランやヒューズが言うようにガードナーは、作家への道の足がかりとしてよりハードルが低いパルプ・マガジンのハードボイルドの道を突き進むことになる。

ガードナーは、小説を書き始めた1921年に早くもパルプ・マガジンの一つ『ブリージー・ストーリーズ』誌に初めて彼の作品を2本売り込むことに成功している。し

かし、ハードルが低いと言っても、パルプ・マガジンに採用されるのは駆出しの作家にとってはそれ程簡単ではなかったようでその後2年間は売込みに失敗している。1923年に『ブラック・マスク』誌へチャールズ・M・グリーン名義の作品を送ったが、最初は採用されなかった。しかし、返却された原稿に当時販売部長のフィル・コディの批評が書かれた紙が紛れ込んでいた。そこで、ガードナーはその批評に従って3晩掛けて書き直し、それを再度送り、採用される話はよく知られている。それをきっかけにガードナーは、「ブラック・マスクの市場に波状攻撃をしかけた…たまには作品を買ってもらえ」ようになる²⁶⁾。

ガードナーが彼の作品の主人公をハメット流のハードボイルドな弁護士に仕立て上げた理由は、明らかに、その種の雑誌への掲載を目論んでいたからである。しかし、このメイスンが誕生する前にガードナーはエド・スターク (Ed Stark) という名前の若き弁護士を主人公とする作品を書いている。しかし、それは『ブラック・マスク』誌には断られている。それにもかかわらず、ガードナーはサム・キーン (Sam Keene) という名前の同類の弁護士の作品を書き上げる。結局、それらの作品は出版社のウィリアム・モロー社に買い上げられることになり、そこから同社とガードナーの長い付き合いが始まり、ペリー・メイスンが誕生することになる。当初、その出版社の社長のサイアー・ホブスは主人公のスタークとキーンと言う名前が気に入らなかった。そこで、ガードナーは少年の頃に定期購読していた *Youth's Companion* という雑誌の表紙に太い活字体で印刷されていた出版社のロゴの "Perry Mason And Company" からヒントを得て、結局、ペリー・メイスンと言う名前が誕生することになる²⁷⁾。

しかし、この一連の流れから判断すると『ブラック・マスク』誌に断われた作品の主人公の人物設定はその雑誌の求めるハードボイルド度に合わなかったことになる。しかし、ノーランによると、「メイスンの直接の原型」は1932年11月に『ブラック・マスク』誌に発表された「ニューヨーク出身のケン・コーニング (Ken Corning) という若い戦う弁護士」である²⁸⁾。つまり、メイスンはその雑誌のハードボイルド基準に合った人物像と言うことになる。ちなみにガードナーはコーニングを主人公にする中篇の作品を1933年の8月までにさらに5本同誌に発表した。ペリー・メイスン作品の出版によりコーニングは姿を消すことになる²⁹⁾。そのコーニングを基に誕生したメイスンが、「『ブラック・マスク』誌のハードボイルドの伝統に染まっている」のは当然の流れと言えよう。フランシス・ネヴィンズは、1936年までに発表された「最初の9作品までのメイスン」はこの初期のメイスンであると述べている³⁰⁾。とにかく、初期のメイスンがハードボイルド的の主人公になった一つの要因が、ガードナーが作品を売り込もうとした雑誌の求める作風に合わせた結果であることは明らかである。それに加えて、そこにはもう一つの要因がある。それはしばしば

言及されている点で、ガードナー自身の性格である。

ヒューズは、「メイスンがガードナーであり、ガードナーがメイスンであることに気づくのに探求や詮索はいらない」³¹⁾と述べ、さらに、「弁護士としてのペリー・メイスンはアール・スタンレイ・ガードナーから明らかに彼のトリックを学んでいる」³²⁾と書いている。デイヴィッド・ハンサーも、「ペリー・メイスンがある日ハミルトン・バーガー地方検事とトラッグ警部補にとって頭痛の種となるのとほとんど同じほどに、合法性が疑わしい物議を醸す戦術に対する彼（実際に弁護士をしていた当時のガードナー）の強い好みは地元の検察官や法執行官たちの頭痛の種に彼をした」³³⁾と書いている。さらに、ガードナーがホブスンに送った手紙の中で、「実を言うと私は人間がはなはだハードボイルドにできている」³⁴⁾と書いている。つまり、ガードナーがハードボイルドな性格であることは自他共に認める事実とすることになる。結局、彼は雑誌への掲載採用の目的で、出版社側が求める類の主人公を作り出そうとする一方で、実際の弁護士ガードナーの弁護方針や活動自体がハードボイルドの世界に近く、それがその主人公に投影された結果、ハードボイルド流メイスンが誕生したことになる。

ところで、この前書きの最後の箇所を読むと、ガードナーのその初期のメイスンに対する思いが明らかになる。ガードナーは、「初期の頃のメイスンに遭遇したい」とか、「禁酒法時代のもぐり酒場や個人の責任による行動決断の時代に郷愁の思い」を抱く読者には、このリプリント版が「支払った金に値する興奮と娯楽」を与えると確信していると書いている³⁵⁾。それは、弁護士時代のガードナー本人がより投影されているその初期の頃のメイスンに捨てがたい愛着を持ち、ガードナー本人が変身させたとは言え、初期の頃のメイスンの方がその後のメイスンよりも好きだったのではないかと思わせる内容である。この前書きを書いた時を1961年頃と仮定するとガードナーは既に72歳ぐらいの年齢になっている。人生の晩年を迎えたことで、彼の作家人生の成功を決定付けた原点とも言えるペリー・メイスン、とりわけ彼の分身とも言える初期のメイスンに対する思い入れはより一層強まっていたのではないかと推測される。さらに、その箇所は、本を売り込むセールスマンの言葉の様でもあり、読者を意識して作品を書いていたと評されるガードナーらしい一面も見せている。

c. ペリー・メイスンを変身させた最大の要因：スリック・マガジン

それでは初期のメイスンにそれ程の愛着を抱くガードナーがなぜ彼を変身させることになったのだろうか。それを説く鍵は、“fame has disadvantages”つまり「名声にはデメリットがある」と言う前書きの中の箇所である。その初期のメイスンと対比して、その後のメイスンをガードナーは、“the celebrated Perry Mason”と評しているが、人気と知名度が上がるにつれ、当然の如く、彼の言動がより多くの人々の目

に晒され、精査されることになる。それにより、倫理的、道徳的、法律上の規範に合った行動がより求められると言うプレッシャーがかかると言うデメリットをガードナーは示唆していると思われる。ところで、初期のメイスンを読者に弁明する目的で書かれたこの前書きは、実はメイスンを変身させた最大の要因を暴いている。それは、既に言及しているが、彼が、メイスンが誕生してから時間が経過したことを示す指標として、メイスン誕生当時に「大きな勢力を誇るいわゆる高級大衆雑誌」であった『サタデイ・イブニング・ポスト』誌、『コリアーズ』誌、『リバティー』誌の名前を挙げ、それらの存続の有無に言及している箇所である。これらの雑誌はスリック・マガジン (slick magazine) と呼ばれている。その然りげ無い言及の仕方により、ほとんどの読者は単なる雑誌名としてそのまま読み進めてしまう可能性が大きい箇所と言えるが、これらの雑誌の名前を挙げたことで、作家として彼がこれらの雑誌を非常に意識していたことが露見することになる。そこにはそれらの雑誌に対する作家ガードナーの思いが詰まっているとと言える。

実際、ガードナーは自分の小説を、出版社に売り込むことに奮闘していた1925年の段階で、既に、「まだサタデイ・イブニング・ポストに挑戦する勇気を与えてくれるほどの表現力を身につけるにはいたらない」³⁶⁾とその年に彼が雇った出版エージェントのハーディーに書き送っている。この言葉から、ガードナーは、それらの高級大衆雑誌に掲載されるには、高い作品の質が求められることを認め、それらの高級雑誌の中でも、『サタデイ・イブニング・ポスト』誌（これ以降『ポスト』誌と呼ぶ）を掲載目標の頂点に位置づけ、特に意識していたことが分かる。

ガードナーがそれらの高級雑誌の最高位に位置づけたその『ポスト』誌に関して、デイビッド・レイ・パプクは、「20世紀初めのその発行部数と収益はその雑誌をアメリカで最も成功した雑誌にさせ」、「当時の社会全体の基調を定め、何百万人もの主流アメリカ人の心に訴える価値観を擁護」し、第1次世界大戦後のアメリカの雑誌界で「高級大衆雑誌の中の王者」³⁷⁾であったと述べている。その読者は男女比がほぼ同率で、販売部数は増加し続け、1937年には初めて300万部を超えている。それは、「公立学校や大きな百貨店や…ホットドックやソフトクリームと同じぐらいアメリカ的である」³⁸⁾とアメリカの新聞雑誌の歴史家のフランク・ルーサー・モットが評する存在になっていた。『アメリカ雑誌をリードした人びと』の中で、桑名淳二は「どの号の小説も、この雑誌の編集方針に合わせて書かれていて、内容はアメリカン・ライフを描いたもの」と言う『ポスト』誌の編集長のジョージ・ホーレス・ロリマーの言葉を引用している。そして桑名は、「ノーマン・ロックウェルの表紙から、特集記事や小説までが、うまく重なり合って表現され、アメリカとは何か、それとも、アメリカとはどうあるべきかを、保守的で、しかも中流階級の人々に合わせて、編集されていた」³⁹⁾と評している。ガードナーにとって、主として男性読者が中心の『ブラック・

マスク』誌などのパルプ・マガジンではなく、そのように多くの主流米国人に読まれている高級雑誌の頂点にいる『ポスト』誌に掲載されることは、彼の作品の質が認められ、作家としてのガードナーと彼の作品の知名度を上げ、新たな高級雑誌の男性だけでなく女性読者も獲得し、彼の作品の売り上げを押し上げる機会を与えてくれることを意味していた。

さらに、ガードナーが1926年に弁護士稼業（当時年収2万ドル）と作家の二足のわらじを脱ぐことを考え始めた時、作家業だけで生計を立てられる年収を1万ドルと考え、その程度の収入を稼げるかをハーディーに聞いている。その時ハーディーはガードナーの作品は、「パルプ雑誌用としては大多数が文句の無い出来栄え」であるが、「もっと稿料の高い雑誌用としては、まだまだ合格点に達していない」ので、「もっと良質の作品を書ける余裕」を持ち、「リバティ、コリアーズ、ポスト等の雑誌に送れるものに仕上げることを助言している⁴⁰⁾。既に言及しているように、ガードナーだけでなく、出版エージェントも、パルプ・マガジンとこれら的高级大衆雑誌の間には掲載される作品に求められる質に差があり、高い作品の質が求められることを認めている。しかし、その一方で、1925年にガードナーがハーディーに送った手紙の中で、「今年の七月には六万語あまりを送り出し、私の最高月産量を記録しました。七月中に書いた作品で現在までに受け取った稿料が八百五十五ドル、売れなかった作品が二篇。どうかすると一万五千語程度に終わる月もありますが、平均して一ヶ月に二万五千語というところですよ」と述べている⁴¹⁾。この手紙から、当時のガードナーが、作品の質よりもむしろ執筆量と原稿料に重点を置いた作家活動をしていたことが窺い知れる。そうは言っても、パルプ・マガジンの原稿料に関して言えば、たとえば、『ブラック・マスク』誌の稿料は、1語につき1セントから3セントであった⁴²⁾。ガードナーが1921年に『ブリージー・ストーリーズ』誌に売り込んだ作品の原稿料は15ドルであった。1923年にチャールズ・M・グリーンの名で書いた*The Shrieking Skelton* に対する稿料は60ドルであった⁴³⁾。それに関して、アルバ・ジョンストンは、この1,400語からなる作品でガードナーは140ドルを受け取ったので、1語当たり1セントであると書いている⁴⁴⁾。どちらの稿料にせよ、ガードナーが1921年に文章を書き始めた年に稼いだのは974ドルである。

そこで、より効率良く稼ぐ道がスリック・マガジンへの掲載と言うことになる。既に言及している様に、ハーディーがガードナーにパルプ雑誌用には合格であるとしても、より上の雑誌を目指して「もっと良質の作品を書く」ように助言したとき、「遠からず短編一本で4,500ドル稼げるようになることを祈る」と1926年の段階で述べている⁴⁵⁾。1932年に『もっともな疑念』と言う長編小説が『リバティ』誌から送り返されたことから、『コリアーズ』誌にそれを送ったハーディは「買取で1万ドル出す」のではないかと期待したのは、当時の高級大衆雑誌の連載権が「1万から5万ドル」

であったからである。しかし、結局それは、コリアーズにも採用されなかった⁴⁶⁾。しかし、既に言及しているように、「新興の」⁴⁷⁾リバティ誌へのメイスン作品の売込みが1933年に成功し、その翌年に*The Case of the Howling Dog* (邦題：『吠える犬』)が連載されることになる。そこで連載契約金は、2,500ドルで、それは作家としてのガードナーが「一度に手にした金としてはこれまでの最高であった」⁴⁸⁾。

ところで、パプクによると、第1次、第2次世界大戦の間、『ポスト』誌は原稿料として、「短編に対して5,000ドルも払い、連載小説に対しては5万から6万ドル」⁴⁹⁾で、どこよりもその稿料が高かった。初期の頃のメイスンに決別した11作品目の*The Case of the Lame Canary* (邦題：『カナリアの爪』)の売込みに成功した時、「『ポスト』誌に作品が初めて掲載された作家に対しては高額の15,000ドル」⁵⁰⁾をガードナーは受け取っている。それは、『ポスト』誌の求める基準に合わせるために主人公をさらに変身させるには非常に魅惑的な誘因となったのは明らかである。

1933年に『ポスト』誌への売込みが試みられるが、ガードナーの主人公とその話の筋は同誌にとっては、「余りにも不愉快で気に入らない設定」であると言う理由で、成功していない。ガードナーと彼の出版エージェントはこの言葉を彼の作品は余りにも「ハードボイルド」過ぎると言う意味に解釈したとパプクは述べている⁵¹⁾。しかし、上記で述べたように37年にメイスン作品の11番目となる*The Case of the Lame Canary*の売込みに遂に成功することになる。ノーランは、ガードナーが「何年もの間『ポスト』誌に上手く入り込もうと努力して」きていたので、「この主要な大躍進を勝ち得て」、「大喜びであった」⁵²⁾と書いている。しかし、残念なことに、その後は売込みに成功していない。その理由としてヒューズは、当時のポスト誌の編集長のジョージ・ホーレス・ロリマーは「読者にとりわけ人気のある女流ミステリ作家の作品を好」み、「メイスン物を買上げたとき、これでポスト誌は例外をつくった」と感じ、さらに、メイスン作品をリバティ誌が先に連載したのが「気に入らなかった」と書いている。それも影響したのか、メイスン作品が連続してその出版社に採用されることは無く、彼は「悪戦苦闘」することになる。その『ポスト』誌との関係には「最後まで慣れることができなかった」とヒューズは伝えている。ガードナーは『ポスト』誌が「相手では、議論したところで作家に勝ち目はない」し、彼らは「財力と名声と権威をバックに、われは無謬なりとそっくり返っている」と評し、メイスン作品を彼らの「公式に合わせようとするのは考えものだと思う」とさえ述べ、好結果を生み出さない売込みにイライラした思いを吐露している⁵³⁾。

そのような思いを抱きつつも、既に言及しているように、ガードナーはメイスンの性格を徐々にパルプ・マガジン誌やハードボイルドのファンではなく、それら的高级大衆雑誌向けの弁護士へと意識的に変えている⁵⁴⁾。1939年にガードナーはA・A・フエアのペンネームで女性探偵と男性の助手の二人が主人公の「ユーモア・ミステリ」

を発表し、メイスン・シリーズの継続危機が訪れた時、彼は、「メイスンの変化が徐々に進んできていること、そして彼が相当数の一定の愛読者を持っていることを承知している」⁵⁵⁾と述べ、メイスン作品を継続している。ここで、1937年発表の10作目以降続いているメイスンの変身が徐々に進んでいることをガードナー本人が認めたことになる。それにもかかわらず、1941年になっても、『ポスト』誌へのメイスン作品の売込みには苦戦していた。その結果、1942年にガードナーの出版エージェントとなったウィリス・キングズリー・ウィングにとって、「まず一番に、ペリー・メイスンをサタデー・イブニング・ポスト誌の一員に昇格させることが…最大の仕事だった」とヒューズは書いている⁵⁶⁾。結局、『ポスト』誌には、42年に*The Case of the Careless Kitten* (邦題：『そそっかしい子猫』)が採用されることになる。しかし、その後は、再び不採用が続くが、53年から1962年までの間に合計14作品が結局は掲載されることになる⁵⁷⁾。

その一方でガードナーは、1943年の9月に『ブラック・マスク』誌に作品を発表したのを最後に、パルプ・マガジンを卒業することになる。パルプ・マガジン全体が1940年に台頭したペーパーバックに押され気味で衰退気味の方向に向かっていたのも影響していると考えられる⁵⁸⁾。ちなみに、『ブラック・マスク』誌は1951年に廃刊となっている⁵⁹⁾。ハードボイルドなメイスンは既に変身を遂げていたが、ガードナー自身もこの頃にハードボイルドの世界を卒業することになる。

ウィリアム・F・ノーランがメイスンの変身に関して、「ガードナーの作風は年を経て円熟し、ペリー・メイスンも成熟した」⁶⁰⁾と評している。しかし、これまで論じてきたことから、この『幸運な足の娘』の前書きで、その名前に言及したことにより、その変身を促した最大の、もしかしたら本当の要因は、スリック・マガジン、その中でもとりわけ、『ポスト』誌とその高い稿料であることが判明する。

d. 初期のメイスンに対する弁明の必要性

それでは初期のメイスンに愛着を抱くガードナーがこの前書きを添付してまで、読者に理解を求めた理由は何であろうか。ペリー・メイスン作品は、1962年にはポケットブックで売り上げが「1億部を突破」するほどの人気を得て、ジェームズ・マクダウェルの言葉を借りれば、「20世紀のもっとも有名な弁護士」⁶¹⁾とも評される程の知名度を獲得することになる。ちなみに、それは既に推測しているこの前書き添付時期とほぼ符合している。ところで、その様に人気が上がったとは言え、この時期にこの前書きを添付する必要をガードナーが感じた理由はなんであろうか。それについて次に詳しく見てゆくことにする。

その人気を押し上げ、初期のメイスンに対する釈明の必要性が生じた原因として、人々がメイスンの名前を知る媒体の変化を挙げることができる。まずメイスンはパル

プ・マガジンやスリック・マガジンなどの紙媒体を通して読者に知られることになる。そして、その過程でメイスンは変身し、より多くの読者を獲得してゆくことになる。

そして、「1930年代から40年代にかけて」、娯楽番組が「最盛期を迎え」るラジオがそれに加わる。ガードナーは、「運よく連続番組に採用」されると、映画化ほどではないが「それに近い莫大な報酬を原作者が手にする」という経済的理由に誘われ、さらに、ラジオ・ドラマ化は、「著書の宣伝」にもなる上に、「名前に箔をつけたい」と言う思いがそこに働いた。さらに、彼の競争相手のエラリー・クイーンが一足先にラジオ番組を持っていたことに対する競争心も加わり、ラジオ・ドラマ化に向け積極的に働きかけたとヒューズは書いている⁶²⁾。その努力が実り、メイスン作品はラジオで1943年10月18日から1955年12月30日まで毎日15分間週5日、合計で3,000回放送された。そのラジオの放送時間は共に東部時間で、最初の1944年3月31日までは午後2時45分、その後1945年3月23日までが2時30分、最後が2時15分である⁶³⁾。しかも、スポンサーがジェネラル・フーズとプロクター・アンド・ギャンブル(P&G社)で、いわゆる主婦向けの時間帯とスポンサーで、「昼間のソープ・オペラに仕立てられ」放送された⁶⁴⁾。この放送により、それまでのメイスン・ファンは雑誌や本の読者が中心であったが、メイスンの名前は、ラジオをこの時間帯に聴く機会を持つ主として女性層に広まることになる。さらに、ソープ・オペラ的メイスンのイメージが植えつけられることになる。

そのメイスンのイメージをさらに強力に固定する機会が訪れる。それはテレビ放送である。そのテレビ番組は、1957年9月21日から1966年5月22日まで45分から48分枠で、271話も放送され続けた。放送時間帯は1962年5月までが土曜日の夜の7時30分から、次に63年5月までが木曜日の8時、64年の5月までが木曜日の9時、65年の5月までが木曜日の8時、最後が日曜日の9時である⁶⁵⁾。そのどの放送時間も、プライム・タイム、いわゆるゴールデンタイムと呼ばれる時間帯である。そのことからその番組の人気の高さを窺い知ることができる。それと同時に、それは家族が団欒する時間帯でもあることから、主人公や内容が「家族向け」であることが求められるのは当然の成り行きである。さらに、メイスンは、その頃には既にハードボイルド雑誌の読者対象の初期のメイスンではなく、成功した弁護士に変身を遂げている。ガードナーはラジオ時代には果たせなかったそのメイスンの「性格」を、メイスン・シリーズ製作会社を自ら設立し、護ろうとしているので、なおさらその「成功したメイスン」の姿が固定されることになる⁶⁶⁾。つまり、その当時のラジオから始まりテレビに至る視聴者たちが抱くメイスン像は、明らかに変身後のメイスンと言うことになる。それゆえに、彼らがそのイメージを持ったまま初期のメイスンが活躍する作品を読むと違和感や衝撃を感じる可能性は否定できなかつたであろう。それを和らげる必要性をガー

ドナーは感じ、この前書き添付となったと考えられる。そこで、1957年から1966年のテレビでの放送期間と人気を念頭に置き、前書きの添付時期に話を戻すと、それは、あくまでも推測の域ではあるが、ガードナーがこの作品の版權を更新した年の1961年が一番妥当であると言う結論にここでも辿り着く。

この前書きの中で、ガードナーがペリー・メイスンの人物像を初期のハードボイルド的メイスンとその後の成功したメイスンとをはっきりと区別し、その変身をもたらした原因として、メイスンが有名になったからという点を挙げている。しかし、既に論じている様に、実際にはそれ以上の原因がそこには隠されている。それは時代の経過を示す指針としてガードナーが「何気なく」を装い名前を挙げている高級大衆雑誌である。とりわけ彼がこの前書きを添付した時にも「生き残っている」と特記しているその『ポスト』誌との掲載を巡る葛藤がこの前書きには隠されている。それゆえに、この前書きは、『ポスト』誌に代表されるそれらの雑誌とその読者の好みに合わせて主人公を変身させた彼の心中と彼が創り出した主人公のペリー・メイスンに対する思いを知る上において貴重な情報を与えてくれると言えるだろう。ちなみに、この前書き添付時期を1961年とする説に符号するかの如く、1959年初版の日本語翻訳版には、この前書きは入っていない。

おわりに

ガードナーのペリー・メイスン作品の内、1949年以前に出版された作品の中で前書きが添付されているのは正式には1作品である。それは一見すると旅行記のように思えるが、実は第2次世界大戦という当時の時代を反映する内容を含んでいる。それと同時に、米国とラテンアメリカ諸国との間の経済格差とその問題解決に焦点を当てている。より多くの平均的米国人が旅行に行けるようになり、その旅先での地元住民との交流を通して築かれる友好関係が問題解決に向かわせると読者にガードナーは訴えかけている。その内容は、読者にそれらのことに関心を抱いてくれるように促しているとも解釈できることから、ある意味で、読者を啓発する内容となっている。一方、これ以外には前書きが添付されていないとされる1949年以前に属するが、前書きが添付されているのが判明したのが、『幸運な足の娘』である。その前書きは、一見すると初期のペリー・メイスンに対する弁明となっている。しかし、その行間には、その2つのタイプのメイスンを作り出した著者としてのガードナーの思いが込められており、メイスンと共に歩んできた彼の作家人生が凝縮されている内容となっている。それゆえに、ガードナーに関する重要な資料の一つとして評価できるだろう。さらに、この論文では、この前書きを発見し、その時期を1957年から1968年に絞り、1961年に添付されたという結論に至っている。次回はガードナーの前書きの転

換期となる1949年以降の前書きを見てゆくことにする。

《注》

- 1) クリスティーの前書きに関して、参照：日吉和子、「探偵小説における前書きの特徴 アガサ・クリスティー、ジョン・ディクスン・カー、エラリー・クイーン」、城西大学国際文化研究所紀要、第19号、2014年3月、pp. 92-116, pp. 108-114。日吉和子、「アガサ・クリスティーの前書き」、城西大学国際文化研究所紀要、第20号、2015年3月、pp. 68-88。
- 2) 前書きの分類に関して、参照：「探偵小説における前書きの特徴 アガサ・クリスティー、ジョン・ディクスン・カー、エラリー・クイーン」、p. 92。
- 3) 引用・参照：Erle Stanley Gardner,
The Case of the Fenced-In Woman, Ballantine Books, New York, 1995.
(Copyright: 1972 by Jean Gardner) 邦題：『囲いの中の女』
The Case of the Postponed Murder, Ballantine Books, New York, 1995.
(Copyright 1973, by Jean Gardner) 邦題：『延期された殺人』（出版社からの注の翻訳は筆者による）
- 4) 参照：Erle Stanley Gardner,
The Case of the Green-Eyed Sister, Granada Publishing Limited, London, 1970.
(Copyright 1953) 邦題：『緑色の眼の女』
The Case of the Troubled Trustee, Walter J. Black, Inc, New York, (出版年記載無し)。(Copyright 1965). 翻訳版：E・S・ガードナー、『使い込まれた財産』、宇野利泰訳、早川書房、昭和54年12月、東京。翻訳版にもガードナーの前書きはない。
- 5) 引用：ドロシイ・B・ヒューズ、『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』、吉野美恵子訳、早川書房、1983年、p. 161。
- 6) Erle Stanley Gardner, *The Case of the Golddigger's Purse*, Pocket Books, Inc., 1951, 7th printing 1956, pp. V-VI. 邦題：E・S・ガードナー、『黒い金魚』、尾坂力訳、早川書房、昭和55年発行、昭和56年 2刷、東京、pp. 3-4。
- 7) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』、p. 161。
- 8) この段落内での引用2箇所：*The Case of the Golddigger's Purse*, p. vi. (筆者による翻訳)
- 9) この段落内での引用：『黒い金魚』、翻訳版、p. 3。
- 10) 引用：*The Case of the Golddigger's Purse*, p. v. (筆者による翻訳)
- 11) 引用：同上、p. v. (原書の引用後のカッコ内は筆者による翻訳) 引用：『黒い金魚』、翻訳版、p. 3。
- 12) 引用：『黒い金魚』、翻訳版、p. 3。
- 13) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』、p. 84。
- 14) 引用：*The Case of the Golddigger's Purse*, p. v. (筆者による翻訳)

- 15) 引用：『黒い金魚』， 翻訳版， p. 4。（最後の引用のカッコ内は筆者による注）
- 16) 引用：同上， 翻訳版， p. 4。
- 17) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』， pp. 382-383。
- 18) Erle Stanley Gardner, *The Case of the Lucky Legs*, Ballantine Books, New York, 1st Edition, Dec. 1990. (Copyright 1934)（これ以降前書きからの引用は筆者による翻訳） 翻訳版：E・S・ガードナー，『幸運な足の娘』， 林房雄訳， 東京創元新社， 1959年， 1968年17刷， 東京。
- 19) 参照・引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』， pp. 311 - 312。
- 20) 参照：桑名淳二，『アメリカ雑誌をリードした人びと』， 風濤社， 東京， 2003年， p. 79。
- 21) 引用：William F・Nolan, “Erle Stanley Gardner,” *Mystery and Suspense Writers The Literature of Crime, Detection, and Espionage*, Vol. 1, ed. Robin W. Winks, Charles Scribner’s Sons, New York, 1998, pp. 409-425, pp. 415-416.（筆者による翻訳）
- 22) 参照：ハメットについて：権田萬治監修，『海外ミステリー事典』， 新潮社， 東京， 2000年， pp. 242-243。パルプ・マガジンについて：同上， pp. 247-248。『ブラック・マスク』について：同上， p. 279。
- 23) 引用：“Erle Stanley Gardner,” p. 411.
- 24) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』， p. 111。
- 25) 引用：S.T. Kamick, “The case of the bestselling author,” *The Weekly Standard*, Vol. 8 Iss. 20, Feb. 2003, Washington, pp. 35-39, p. 35.（筆者による翻訳）
- 26) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』， p. 118。参照：日吉和子，『E・S・ガードナーの「ペリー・メイスン」絶滅の謎』， 城西人文研究， 第31巻， 2012， pp. 19-53, pp. 40-41。
- 27) 参照：“Erle Stanley Gardner,” p. 413.
- 28) 引用：William F. Nolan, “Black Mask Boys; Erle Stanley Gardner,” *Mystery Scene*, Vol. 53, 1996 May-June, Mystery Enterprises 1, Cedar Rapids, IA, pp. 42-46, p. 43.（筆者による翻訳）
- 29) 参照：“Erle Stanley Gardner,” p. 414.（筆者による翻訳）
- 30) 引用：“Black Mask Boys; Erle Stanley Gardner,” p. 44.（筆者による翻訳）
- 31) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』， p. 31。
- 32) 引用：同上， p. 32。
- 33) 引用：David Hansard, “The Case of the Forgotten Master,” *Mystery Scene*, vol.102, Mystery Enterprises 198u 999, Cedar Rapids, IA, 2007, pp. 32-35, p. 33.（カッコ内の注と翻訳は筆者）
- 34) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』， p. 174。

- 35) 引用： *The Case of the Lucky Legs*, 前書き。(筆者翻訳)
- 36) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』, p. 131。
- 37) 引用：David Ray Papke, “Lawyer Fiction in the Saturday Evening Post: Ephraim Tutt, Perry Mason, and Middle-Class Expectations,” *Cardozo Studies in Law and Literature*, 2001 Fall, pp. 207-220, p. 214. (筆者による翻訳)
- 38) 引用：同上, pp. 208-209。
- 39) 引用：『アメリカ雑誌をリードした人びと』, p. 78。
- 40) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』, pp. 135-136。
- 41) 参照：同上, p. 131。
- 42) 参照：同上, p. 128。
- 43) 参照：同上, p. 118。
- 44) 参照：Alva Johnston, *The Case of Erle Stanley Gardner*, William Morrow & Company, New York, 1947, p. 27. (筆者による翻訳)
- 45) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』, p. 136。
- 46) 引用・参照：同上, p. 142。
- 47) 引用：同上, p. 139。『リバティ』誌は1924年に創刊される。
- 48) 引用：同上, pp. 164-165。
- 49) 引用：David Ray Papke, p. 209. (筆者による翻訳)
- 50) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』, p. 30。
- 51) 参照：David Ray Papke, p. 214. (筆者による翻訳)
- 52) 引用：“Black Mask Boys; Erle Stanley Gardner,” p. 44. (筆者による翻訳)
- 53) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』, p. 228。
- 54) 引用：同上, p. 222。(具体的な変化に関しては参照：『E・S・ガードナーの「ペリー・メイスン」絶滅の謎』, pp. 44-45。
- 55) 引用：Dorothy B. Hughes, *Erle Stanley Gardner The Case of the Real Perry Mason*, William Morrow and Company, Inc., New York, 1978, p. 149. (筆者による翻訳)。参照：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』, pp. 221-222。
- 56) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』, p. 228。
- 57) 参照：採用され掲載された作品：
 1942年 *The Case of the Careless Kitten* (邦題：『そそっかしい子猫』)
 1953年 *The Case of the Fugitive Nurse* (邦題：『消えた看護婦』)
 1954年 *The Case of the Restless Redhead* (邦題：『落ち着かぬ赤毛』)
 1955年 *The Case of the Sun Bather's Diary* (邦題：『日光浴者の日記』)
 1955年から56年にかけて, *The Case of the Demure Defendant* (ポスト誌の題名は“The Case of the Missing Poison”) (邦題：『取り澄ました被告』)
 1956年 *The Case of the Lucky Loser* (邦題：『運のいい敗北者』)
 1957年 *The Case of the Long-Legged Models* (ポスト誌の題名は, “The Case

- of the Dead Man's Daughter”) (邦題：『長い脚のモデル』)
- 1958年 *The Case of the Foot-Loose Doll* (邦題：『気ままな女』)
The Case of the Deadly Toy (ポスト誌の題名は“The Case of the Greedy Grandpa”) (邦題：『恐ろしい玩具』)
- 1959年 *The Case of the Mythical Monkeys* (邦題：『死のスカーフ』)
The Case of the Waylaid Wolf (邦題：『待ち伏せていた狼』)
- 1960年 *The Case of the Duplicate Daughter* (邦題：『瓜二つの娘』)
- 1961年 *The Case of the Spurious Spinster* (邦題：『車椅子に乗った女』)
The Case of the Bigamous Spouse (邦題：『重婚した夫』)
- 1962年 *The Case of the Mischievous Doll* (邦題：『無軌道な人形』)
- 58) 参照：“Black Mask Boys; Erle Stanley Gardner,” p. 45.
- 59) 参照：荒俣宏，『パルプマガジン 娯楽小説の殿堂』，平凡社，2001年，東京，p. 176。
- 60) 引用：“Black Mask Boys; Erle Stanley Gardner,” p. 44. (筆者による翻訳)
- 61) 引用：James L. McDowell, “Perry Mason: America’s Lawyer,” *The McNeese Review*, Vol. 36, The College of Liberal Arts at McNeese State University, La., 1998, pp. 27-42, p. 27. (筆者による翻訳) 参照：『E・S・ガードナーの「ペリー・メイスン」絶滅の謎』，p. 27。
- 62) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』，p. 318-319。
- 63) 参照：Perry Mason(radio)-Wikipedia, the free encyclopedia, ([http://en.wikipedia.org/wiki/Perry_Mason_\(radio\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Perry_Mason_(radio)), 2012/01/15) ヒューズによると，その12年間に3,221本の台本が作られたと書いている，『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』，p. 341。ノーランも“Erle Stanley Gardner”の中でラジオでは3,221編あると述べている，p. 409。
- 64) 引用：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』，p. 328。
- 65) 参照：Perry Mason (TV series)-Wikipedia, the free encyclopedia: ([http://en.wikipedia.org/wiki/Perry_Mason_\(TV_series\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Perry_Mason_(TV_series)), 2012/01/13)
このテレビ放送に関して参照：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』，p. 352。このラジオとテレビ放送に関して参照：『E・S・ガードナーの「ペリー・メイスン」絶滅の謎』，pp. 31-34。
- 66) この制作会社について参照：『ペリー・メイスン自身の事件 E・S・ガードナー伝』，p. 343。